

【研究ノート】

生涯学習として英語を学ぶ人たちのニーズ分析

糸 井 江 美

Needs Analysis for Lifelong Learners of English

ITOI, Emi

要旨：受講者が満足する語学コースを作るには適切なニーズ分析が欠かせない。大学と自治体の生涯学習課が開講する二つの英会話クラスの受講者を対象にニーズ分析を実施した。両グループ共に、最も伸ばしたいスキルはスピーキングの力であった。絵本を授業で使った自治体の生涯学習課グループでは、翌年度にも絵本を使用したい希望が多かった。大学の生涯学習課グループとは質問紙調査の結果について話し合いを行った。その結果、海外旅行の他にもさまざまな理由で英語を学んでいることや、スピーキングの力が伸びることは諦めている人や、リーディングの力は充分にあるのでそれ以上勉強する必要性を感じていない人などがあることが分かった。

キーワード：生涯学習，高齢者，英語，ニーズ分析，絵本

1 はじめに

語学コースを開講する準備段階として、あるいはコースの過程や終了時において主催者や指導者が考慮すべきことの一つに学習者のニーズがある。学習者のニーズを正確に知ることによって、学習者のニーズに合った適切な教材、タスク、評価方法などを考慮したコース作りや、コース途中における軌道修正が可能となる（Dudley-Evans & M. J. St John, 1998）。しかし、実際には、時間的な制約や指導者の認識不足からニーズ分析を実施しない

場合や、学習者自身が、自分のニーズを正確に把握しておらず、「必要なこと (needs)」、「欲すること (wants)」、「不足していること (lacks)」の区別ができていない場合がある (Kavaliauskiene & Užpaliene, 2003)。

学習者の満足度を高めるために、教師はニーズ分析の意義や方法を理解するだけでなく、学習者にもその意義を理解してもらい、有益な情報提供に協力してもらうことが重要だ。本研究ノートの目的は、二つの英語クラス（大学の生涯学習課と自治体の生涯学習課が開講する英語クラス）の参加者を対象に実施したニーズ分析の結果から、生涯学習として英語を学ぶ人たちのニーズ分析について今後の研究課題をいくつか示すことである。

1.1 ニーズ分析とは

語学学習者のニーズ分析とは、学習者が既に知っていることや実際にできること、そしてこれから学びたいことやできるようになりたいことを質問したり観察したりすることによって探り出し、それをその後の授業に活かすことである。研究者によって、ニーズ分析の定義には幅があり、例えば「英語教育用語辞典」(白畑他, 1999; p.202) の *needs analysis* (ニーズ分析) の項目では、「学習者が将来どのような目的や状況で外国語を使うようになるのかを予測し、それをもとにどのような言語能力を伸ばす必要があるのかを分析すること」と定義されている。

ニーズ分析の中でも、将来、学習者が目標言語を使う状況を特定し、それに基づいてニーズ分析を行うものは、目標状況分析と呼ばれ (*target situation analysis*)、教師の観点から見た客観的、認知的、成果志向のニーズを対象とする。どのように学ぶか、どのように動機付けられるのかを分析する学習状況分析 (*learning situation analysis*) では学習者が持つ主観的、感覚的、過程志向のニーズを対象とする。また、現状分析 (*present situation analysis*) では学習者が持っているその時点での言語能力、スキル、学習経験における強み、弱点などを対象に分析する (Dudley-Evans & M. J. St John, 1998)。

ニーズ分析の目的は、学習者を人間として、言語使用者として、そして言語学習者として知ること、言語／スキル習得の最大効果を生むにはどうすればよいかを知ること、そして、データを正しく解釈するために学習が行われている状況や環境を知ることであると言えるが (Dudley-Evans & M. J. St John, 1998)、言語の使用目的や学習が行われている状況や環境は学習者によってどう違うのかをまず教師は正しく認識することが重要だ。

例えば移民が英語を第二言語として学ぶ場合や、ある特定の目的のために英語を学ぶESP (English for Specific Purposes) のような状況では、ニーズ分析の要素には以下の8項目が含まれる (Dudley-Evans & M. J. St John, 1998; p.125)。:

1. 学習者に関する仕事の情報: どんな仕事や活動に英語を使用するのか。
2. 学習者の個人的な情報: 過去の学習経験、文化的背景、コースを取る理由、コースへの期待、英語への態度。
3. 学習者のその時点での英語力。
4. 学習者に欠けている点: 1. と3. のギャップ。
5. 言語学習に関する情報: 必要なスキルを習得するのに効果的な方法。
6. 職場で使用されている言語とスキルに関する知識: 言語／ディスコース／ジャンル分析。
7. 学習者がコースから何を望んでいるか。
8. クラスを取り巻く学習環境に関する情報。

言語の使用目的を重視したESP (English for Specific Purposes) 分野では、ニーズ分析は礎石であり、分析を正しく行うことによって目的達成のために焦点が絞られたコース作りができる (Dudley-Evans & M. J. St John, 1998)。しかし、具体的な目的を持って英語を学んでいる人は殆んどいないと思われる日本の生涯学習課で学ぶ学習者にとっても、ニーズ分析は重要な意味がある。なぜならば、たとえ英語学習が趣味の一つであり、英語

の授業を受けること自体が目的となっていたとしても、学習者はそれぞれ違う学習経験や学習スタイルを持っており、授業に対する期待もさまざまだからだ（Oxford & Ehrman, 1992）。従って、可能な限り学習者の満足度を高めるには、学習者に関する情報を得るためのニーズ分析が重要な意味を持っているといえる。グレイブズ（Graves, 2000）は日本で主婦に英語を教えた経験から、英語を外国語として教える場合、学習者の興味、経験、背景などの情報を得て、それに関連したシラバスを作成することが重要だと主張している。

1.2 ニーズ分析の為の情報収集方法

理論上、ニーズ分析の過程は以下のステップが繰り返されるサイクルである（Graves, 2000; p.100）： 1. 集める情報は何か、何故その情報が必要なのかを決める； 2. 必要な情報を収集する最適の方法を決める（いつ、どのように、何から、誰から収集するのか）； 3. 情報を収集する； 4. 情報を解釈する； 5. 解釈に従い行動する； 6. 起こした行動の効果や影響を評価する； 7. 新しく集める情報を決める。

ニーズ分析に割ける時間は限られているため、最初のステップで集める情報を決定する際、目的に合った情報を選択し、効率良く集める必要がある。つまり、活用できることが分かっている情報だけを集めることが大切だ。例えば、授業の目的がリーディングの力を付けることの場合、スピーキングの力に関する質問をすることは直接授業の目的に合っていないことになり、設問に答える学習者の混乱を生むことにもなりかねない。また、教師としてある特定の学習方法が効果的であると信じている場合、その学習方法に関する学習者の経験や態度を知ることが重要となってくるかもしれない。さらに、年齢、学歴、家族構成などの個人的な情報が必要な場合は、個人情報保護を第一に考え、学習者の理解を得ることが必要である。

ニーズ分析のための情報は学習者のみならず、学習者の家族や友だち、以前の受講者、研究論文や関係文書などからも収集することができる。ま

たニーズ分析の方法は、質問紙を使ったアンケート調査以外にも、教科書分析、学習者との話し合い（あるいは学習者間の話し合い）、インタビュー、観察、ダイアログ・ジャーナル（学習者が書いた学習に関するさまざまな感想などに教師がコメントを書いてやり取りをする）、授業評価などがあり、必要に応じてそれらを組み合わせる場合もある（Dudley-Evans & M. J. St John, 1998）。具体的な設問の例は、リチャーズに詳しく（Richards, 2001）、ここでは一般的な設問の作り方、香港で中国語を学ぶ学習者やニュージーランドで英語を学ぶ学習者を対象とした質問紙の具体例が20ページ以上に渡り紹介されている。

デタラマニとチャンの二人は、香港の大学生を対象に学習者の自律的学習を促すためのセルフ・アクセス・センターの利用に関して学習者のニーズ分析を行った際、アンケート調査とインタビューの方法を組み合わせた（Detaramani, C. & Chan, S. I. Irene, 1999）。この研究のニーズ分析では22の設問を含む質問紙が640人に配布された（回収率は85.8%）。22の設問の内、5問は学習者自身が自分の英語能力（全体的レベルとリスニング、リーディング、スピーキング、ライティングのそれぞれの能力）をどう評価しているかを問うものである。また、別の3問では、英語の4技能に語彙力と文法力を加えた6項目に関してどれが学習者にとって難しいか、どれが大学や将来の職場で重要だと考えるかが問われた。それ以外の設問はセルフ・アクセス・センターの使用に直接関係するもので、学習者が望む学習支援のための教材や機材を尋ねる設問やセンターを使用する理由などが問われている。

1.3 ニーズの変化

コースのスタート前や直後で集める学習者に関する情報は、時間の経過とともに学習経験が深まることで変化する可能性がある。例えば、学習者の言語レベルが上達すると、到達目標がより高く設定され、将来ターゲット言語を必要とする状況も変わってくる。また、学習者のニーズは、経済

や社会状況の変化に影響を受けたり、個人的なレベルでは教員やクラスメイトの考え方や学習者自身の健康上の問題や家庭の事情などに影響を受けたりすることも考えられる。そこで、コース開始前に実施されるニーズ分析以外に、コースの過程で繰り返しニーズ分析を実施することで、軌道修正が可能になりニーズの変化に対応できるようになる (Graves, 2000)。

また、ニーズ分析が繰り返されることによって、学習者は自己の学びを省察し、自分のニーズを特定し、自律した学習者へと成長していく。それによって学びが単なる教師からの知識の伝達ではなく、教師との、あるいは学習者間の対話になりうる (Graves, 2000)。

KavaliauskieneとUžpaliene (2003) の研究では、法律を学ぶ学生の英語学習におけるニーズの変化に焦点が置かれた。最初のニーズ分析はコース開始前に実施され、コース途中でのニーズ分析は250時間中の120時間分の授業が終わった時点で実施された。ニーズ分析のための設問は6問あり、その中で英語が何に必要かという質問に対しては、コース開始前は8割以上の学生がコミュニケーションに必要だと答えていたが、120時間の授業を受けた後では4割に減り、代わってコンピューター、昇進など具体的な回答が増えた。また、興味深いことにコース開始前の調査では自信のあるスキルにスピーキング (50%) とリスニング (27%) を挙げた学生が多かったが、コース途中の調査ではそれぞれ23%、2%に減少していた。自信のあるスキルが何か分からないという学生は、0%から50%に増加した。質問紙による調査の他に、授業外の時間を使って毎週インタビューが行われ、学生一人ひとりが教師から助言を得る機会が設けられた。ニーズ分析の結果を踏まえてKavaliauskieneとUžpalieneはテクニックを調整し、コンテンツ (内容中心の授業) を充実させ、学生のニーズに答えるようにした。

当然のことながら、ESPのコースを終了し社会に出た学生がまったく違う分野や目的で英語を使うこともありうる。ジャンサン (Jansson, 1981) の調査報告によると、のちに役立つと考えて英語の授業を受けていた多くの学習者は、やがて計画を変えたため、結局は当初の予定とはまったく違

う目的で英語を使うことになっていた。教師はコース終了後のニーズ変化まで責任を持つことは不可能であるが、ESPのコースにおいても、汎用性のある知識や技術を教えることは考慮するに値するだろう。

1.4 ニーズ分析の結果をどう活かすか

ニーズ分析で最も重要なことの一つは分析結果を実際の授業に反映させ、学習者の満足度を上げることである。ニーズ分析の主役である学習者に何らかの形でフィードバックすることを怠ってはいけない。コース開始前のニーズ分析ではその結果をもとにコースをデザインすることができる。コースの途中で行うニーズ分析の結果はシラバスを再考し、軌道調整を行うことに利用できる。コース終了時の授業評価的なニーズ分析は将来のコースをデザインするのに活用できる。

2 生涯学習として英語を学ぶ学習者のニーズ分析

2.1 調査の背景と目的

今回のニーズ分析は、二つの英語クラス（大学の生涯学習課と自治体の生涯学習課が開講する英語クラス）の参加者を対象に行った。便宜上、ここでは大学の生涯学習コースで学ぶ学習者をグループDと呼び、埼玉県のある町の生涯学習課が開講する英語クラスで学ぶ学習者をグループGと呼ぶ。このニーズ分析の主な目的は二つあり、最初の目的はすでに何期かのコースを受講し終えた受講者に、翌年度のコースで使用する教材や重要視して欲しいと願うスキルを尋ねて、授業に活かすことであった。二つ目の目的は、1年間違う教材を使用した二つのグループではニーズに違いが出るか、つまり教員が選択した教材が学習者のニーズに影響を与えるかどうかを知ることであった。生涯学習課（グループDとG）で開講しているコースは、授業回数は10回程度となっており、毎コースごとに受講者を募るため、コースごとに多少の受講者の入れ替わりがある。従って、コース終了

時に実施するニーズ分析の結果が100%受講者に還元されることはないのだが、ある程度シニア層のニーズを把握できれば、翌年度のコースに有効に活用されることになる。

グループGではこの1年間口頭練習中心の教科書（Molinsky, J. S., and Bliss, B. 2003. *Side by Side*. Longman.）の他に、英語絵本を使用した授業を行ってきた（Munch, R. 2002. *Love You Forever*. Firefly Books Ltd., Say, A. 2005. *Kamishibai Man*. Walter Lorraine Books）。選んだ英語絵本は、哲学的とも言える深いテーマを持ったもので、大人が十分に楽しめる内容になっている。それらの絵本を読むことで、絵本の世界を楽しみ、人生の意味をみんなで考えるだけでなく、声に出して何度も読むことでスピーキングの力を付けることにもつなげようとしたものだ。

絵本をまったく使わなかったグループDでは、教科書（Tennant, A. et al. 2006. *Synergy*. Macmillan Languagehouse）の内容以外にジャズ・チャンツの教材を副教材として使用した。ジャズ・チャンツとは、キャロリン・グレアム氏が開発した英語の発音とリズムを身につけるための教授法である（Graham, 2001）。

2.2 ニーズ分析参加者

両グループの学習者の年齢と性別の構成は以下の通りである。

表1 受講者の年齢と性別

性	F	M	F	M	F	M	F	M	F	M	F	M	F	M	F	M
年	46-50		51-55		56-60		61-65		66-70		71-75		76-80		Total	
D			1		2		3	1	1	2					7	3
G	1		1		2		5	1			2		2		11	3

F: 女性、M: 男性、

D: 大学の生涯学習課で学ぶグループ、G: 自治体の生涯学習課で学ぶグループ

グループDは、都心に近い場所に在住している人たちで、60歳代前半が中心である。殆どの人が毎年海外旅行に出かけるような境遇であることも特徴である。ある男性は空港の外国貨幣両替所で勤めていた経験がある。

また別の二人は外国人と結婚した子どもが海外在住という背景を持つ。グループGは、都心からは2時間半の山村に在住している人たちである。70歳代後半の受講者が二人おり、健康や経済的な理由からか、一人を除いて海外旅行に出かける受講者はいない。以前実施したニーズ分析から、仲間と英語を学ぶこと自体が目的となっている人たちだと言える。

学習者は「初級レベル対象」という募集広告を見た上で参加申し込みをしているが、実際のレベルの差は大きい。大人の英語力を客観的に測るテストとしては、米国では主に移民を対象にBasic English Skills Testや、CASAS Life Skillsなどのテストが開発されている。日本では、生涯学習として英語を学ぶシニア層を対象にした英語能力テストは筆者の知る限り存在しないが、今後開講されるコースでは一般的なSTEP英検(日本英語検定協会)やビジネスでの英語使用を意識したTOEICなどの練習問題を授業に取り入れることである程度受講者の英語レベルを知ることができると思う。

2.3 方法

今回の調査では、設問数を次の3つに絞った：1) 4技能のどれを伸ばしたいか、2) どんな教材を希望するか、3) その他の要望。指導者である筆者に気兼ねなく回答できるように質問紙は無記名とした。また、グループDに関しては、質問紙で得られた結果を翌週学習者に口頭で知らせ、それについて全体での話し合いを行った。話し合いを行う利点は、インタビューより時間を有効に使えること、他の受講者の意見を聞くことによってお互いの理解が深まると同時に、授業の内容や使用教材に関して交渉の機会が得られることである。欠点としては、積極的に発言する人、遠慮してあまり自分の意見を言わない人、本筋から離れた話題を延々と続ける人などがあるため、全員から等しく意見を聞けないことがあげられる。

2.4 結果と考察

質問紙調査の結果をグラフ1から4に示した。両グループ共、スピーキン

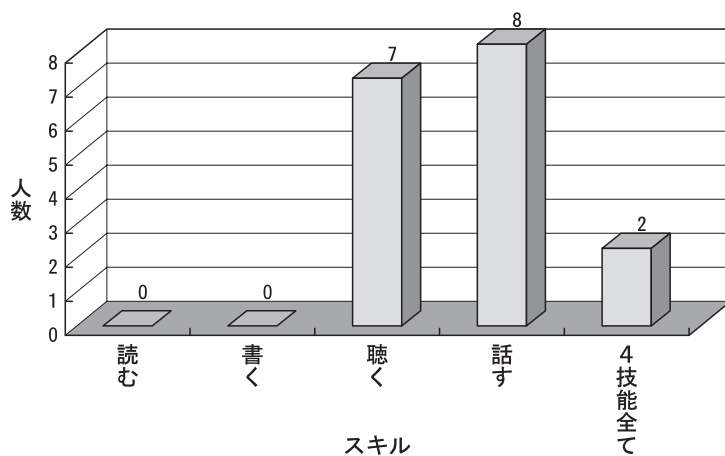
グ、リスニングの力を伸ばしたいと考えている学習者が多いことが分かる。リーディングとライティングを選んだ人は少なく、特にライティングを単独で選んだ人は両グループ共に一人もいなかった。つまり、特に伸ばしたい英語のスキルに関しては両グループに大きな差は見られなかった。

授業で使用したい教材についての質問に関しては、会話に焦点を置いたコースブックを希望する人が多いことが分かる。しかし、副教材として使った絵本とジャズ・チャンツの使用に関しては両グループ間において差が見られた。絵本を教材として使用したグループGでは今後も絵本の使用を希望する人が14名中9名いたが、グループDでは10名中2名であった。グループDでは、副教材として使用したジャズ・チャンツを希望する者が2名いたが、グループGでは、0名であった。以上のことから、学習経験（教師が採用した教材）が学習者のニーズに影響を与えたと考えられるが、そのように判断するには、全ての教材に対する説明を十分に行い、受講者の理解を深めておくことが必要だったといえる。残念ながら今回は、各教材について口頭による簡単な説明をただけなので、結果については議論の余地が残ることとなった。

リーディングの力を伸ばすことにはあまり興味がないグループGの学習者が、絵本を教材に選ぶことは矛盾しているように思える。その矛盾を直接学習者に確認することが出来なかったが、絵本の内容が心を打つものであったこと、声に出しながら読むことでスピーキングの力を伸ばすことにもつながったことから、希望が多かった可能性がある。スピーキング能力を伸ばすのに、その他のスキル（リスニング、リーディング、ライティング）の力が大きく影響していることを筆者が学習者に対し積極的に説明していたならば、調査の結果は違っていた可能性がある。学習者のニーズを分析する前に、ビリーフ（Horwitz, 1985）の調査をすることが有効だと考えられる。

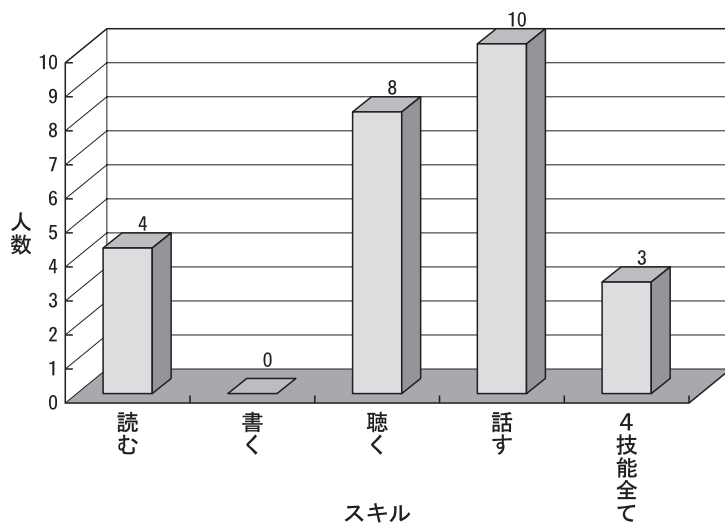
生涯学習として英語を学ぶ人たちのニーズ分析

グラフ1 グループDの伸ばしたいスキル



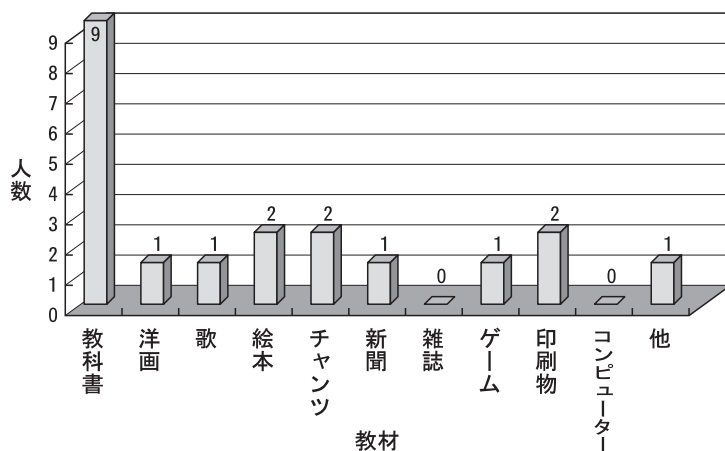
註：複数回答可。

グラフ2 グループGの伸ばしたいスキル

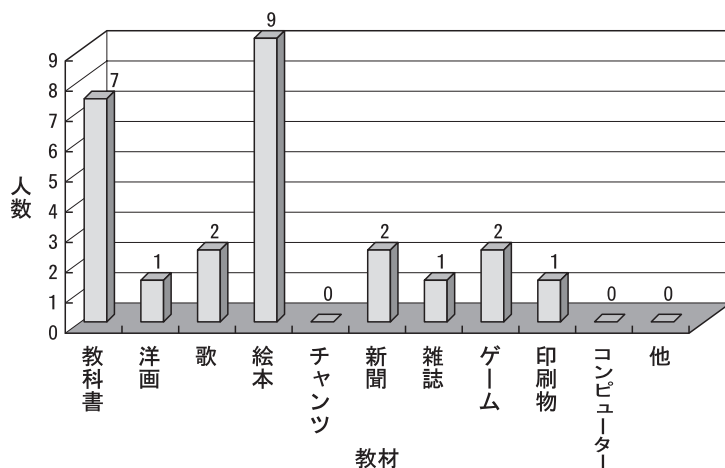


註：複数回答可。

グラフ3 グループDの授業で使用したい教材(授業で使用したい教材を2つ選ぶ。)



グラフ4 グループGの授業で使用したい教材(授業で使用したい教材を2つ選ぶ。)



注：教科書：会話中心のコースブック、ゲーム：英語のボードゲーム・カードゲームなど、印刷物：英語で書かれたガイドブック・ラベル・マニュアル・メニューなど、コンピューター：英語でインターネットやメール。

以上の結果を翌週グループDに報告し、感想を求めると全員からさまざまな意見を聞くことができた。代表的な意見は以下の通りである：

- * 大学の生涯学習課で開講しているクラスは英会話の授業だと捉えているので会話中心の授業を希望する。間違いを恐れずとにかくしゃべることが大切だ。この年齢で新しいことを覚えるのは無理なので現状維持のためにここに来ている。
- * 発音が悪いので外国人には理解してもらえない。発音は諦めた。
- * 海外旅行で使える表現を学びたい。
- * 英語検定試験の2級に何度も挑戦したが受からない。リスニングの部分が難しすぎる。リスニング力をつけたい。
- * 辞書さえあれば英文はある程度読めるのでこれ以上リーディングの勉強をする必要性は感じない。会話を練習したい。
- * 英語を書く機会はないのでライティングを勉強する必要性は感じない。
- * 米国の友人から英語でメールが来るのでそれがもっと楽に読めるようになりたい。

グループDの受講者の多くは定年退職者で、毎年海外旅行を楽しんでいる。そのため、海外旅行を楽しむための会話を学びたいと思っていることが分かった。しかし、中には英語検定試験の2級を目指している人やメールを読むことに興味がある人もいることから、ニーズの幅の広さを実感した。

受講者からの意見で気になったのは、スピーキングの力をつけたいと望みながら、「諦めている」と発言した人が二人いたことだ。しかし、クラスに来ている限り、どの受講者も学びたい意思があり、学び続ける限り各自のペースで上達していくものだ。ただ、高齢者には上達が無理だという思いや、過去の学習経験などから（例えば英語の成績が悪かったなど）、自分の能力に自信をなくしている人もいる。教師は、クラスに来ているも

のは全員学ぶ意思が強いことを認識し、少しでも学習者が自信を持てるような工夫をすることが大切だと言える (Orem, 2005)。

また、読むことに興味を持っている人が少なく、中には辞書を使えば読めるという理由からリーディングの練習は必要ないと感じている人がいた。おそらくリーディングと聞くと、学校教育で受けた訳読法のことを想像しているのではないだろうか。もし受講者が今までの経験からリーディングは退屈で、スピーキングの力をつけるには直接関係ないと思っているのならば問題である。なぜならば、英語で話すには英語での大量のインプットが必要であり、そのインプットを可能にする一つの方法がリーディングだからだ (Cho & Krashen, 1994)。このように学習者が過去の学習経験に縛られている可能性がある場合には、多様な学び方をクラスの中で紹介していくことも教師の役目の一つだといえる。

2.5 結果の活用

今回のニーズ分析では、殆どの学習者がスピーキングのスキルを上達させることを願っていることが分かった。筆者が担当している生涯学習課の英語クラスは「英会話」というタイトルがついているため、自ずとスピーキングに興味がある人が受講したことが考えられる。英語を実際に話す機会があまりないと考えられる人たちには (特にグループG)、意図的に英語を使う機会を教室内外で創造し、目的や達成目標を明確化することでより充実した学びが生まれると考えられる。

東京の台東区で中高年に英語を教えている筆者の知人は、教室外での英語使用の機会を作ることに成功した。彼は、「外国人に観光案内をするための教科書を作成する」という課題を学習者に課した：

この授業では、生徒が教科書で学んだ英語を使って外国人に観光案内するのではなく、英語による観光案内の教科書を作る過程で生徒が生きた英語を学べるようにした。具体的には、東京の台

東区社会教育会館で英会話を勉強している中高年者に、アメリカ人の先生を、日曜日の午後に近くの上野公園に英語で案内してもらうことにした。生徒はまず書籍を読んだり、地元の古老をたずねて、上野公園の観光案内の資料を作成した。その後皆で分担してその資料を英語に直した。当日は英語に直した資料を基に、口頭で先生に説明し、質疑応答を行った。そしてその時録音したテープと撮った写真をもとに、後日、上野公園観光案内の教科書を作成した。生徒はこの言語活動を通じて、英語の4技能を有機的に統合し、実際の英語力の運用をはかった。(Ishida, 2007)

一方、海外旅行のため、英検受験のため、英語でメールを書くためなどのようにすでに明確な目的を持っている受講者に対してはそれに対応できるような目的別のコースが開講されることが理想的である。しかし現実的には、ひとつのコースの中でさまざまなニーズに答える必要があり、教員と学習者、あるいは学習者間での対話、妥協が必要となる。

今年度開講予定の大学の生涯学習課のコースでは、受講者の希望が多かった会話を中心に、絵本や多読教材を紹介し、辞書に頼らず内容をすばやく把握する読み方を紹介する予定である。また、自治体の生涯学習コースでは大人向けの英語絵本を読むことを継続し、さらに幼児向けの英語絵本を子どもたちに読み聞かせる練習をすることを計画中である。将来的には実際に地域の幼児と英語で交流するような活動ができることを目標としている。

2.6 ニーズ分析の継続

今回は、二つの英語クラス（大学の生涯学習課と自治体の生涯学習課が開講する英語クラス）の受講者を対象にニーズ分析を行ったが、いくつかの問題点が明らかになった。まず一般的な学校の授業と違い、生涯学習課が開講するコースは、10回程度で完結するコースが繰り返し開講されるた

め、毎回新しい顔ぶれが加わることになり、ニーズ分析の結果を100%有効に活用することが難しいことだ。そのため、受講している人たちの利益を最優先させることを考えると、授業の開始時点、途中、終了時、というように複数回ニーズを確認することが理想的である。さらに、大学の生涯学習課が開講する英語のクラスは「初級」「中級」「上級」とレベルが設定されているが、受講者は原則的に自己申告によりどのクラスでも受講が可能であるため、クラス内のレベルの差が大きくなり、全体としての目標設定が難しいことも問題点として挙げられる。

しかし、一般的な学校教育と違い、クラスサイズが小さいので（20名以下）より細かな対応が可能である。今年度も引き続きニーズ分析を実施する意向であり、以下の点に留意したいと考えている。

1. 話し合いや観察を中心としたニーズ分析を行う。授業終了後の雑談などにも注意を払い、記録しておく。
2. 授業時間がニーズ分析のために削られていると感じさせないように、授業自体に溶け込んだ形にする。例えば、ある出版社の教科書では最後のレッスン内容が1年間の授業を振り返るトピックになっている。
3. 伸ばしたい言語能力に関する設問は、4技能以外に語彙、文法、発音なども加えてより正確なニーズ分析を行う。
4. 海外旅行に全員が行くようなクラスでは、言語能力に加え、旅行先でのさまざまな場面を想定した異文化間コミュニケーション能力に関する分析を行い、授業へその結果を反映させる。

3 今後の研究課題

今回のニーズ分析の結果を踏まえて、生涯学習として英語を学ぶ学習者を対象としたニーズ分析の研究課題を考えてみる。

1. 学習者ニーズの中で「変化するもの」と「変化しづらい」あるいは

「変化しないもの」があるのか。「変化するもの」は何に影響を受けるのか。また、時間の経過と共にどう変化していくのか。

2. 学習者は自分にとって「必要なこと (needs)」、自分が「したいこと (wants)」、目標達成のために自分に「不足していること (lacks)」は何かをどの程度正確に認識しているのか。今回の調査では、英語を読むことにある程度の自信があるという学習者からの発言があったが、その能力がどの程度なのかを測ることができなかった。筆者が授業を通して感じたことは、学習者たちは訳読式の授業を受けた経験からか、単語を辞書で調べ、それを日本語に一つずつ置き換えていく読み方に馴染んでいるようだが、ある程度のスピードで読むこと、文脈から意味を推測することは不得手のように感じた。
3. その他の研究分野との関連：例えば最近ではビリーフとメタ認知知識との関係が注目されているが (Wenden, 1999)、学習者のビリーフ (Horwitz, 1985) や教師のビリーフに関する研究 (Borg, 2001; Pajares, 1992) とニーズ分析の関係や、学習方略 (Oxford, 1989) との関係も興味深い。
4. 教師と学習者の力関係：生涯学習として英語を学ぶ学習者の中には教師より年上で英語以外の知識や経験が教師よりも遥かに豊かな者がいる。このような学習者は、教師との関係をどのように認識しているのだろうか？ 一般の学生よりも自律した学習者になり得のだろうか。
5. 教師と学習者の対話としてのニーズ分析のあり方：明確な目的を持たない学習者に対して、ニーズ分析ではなく「ニーズ探し」あるいは「ニーズ作り」を一緒に行うことは言語習得に有効か。
6. 学習者の英語力の評価方法：学習者の英語力を出来るだけ正確に評価し、目標レベルとのギャップを知ることが重要であることから、特に高齢者の精神的、肉体的負担のかからない英語能力テストの開発が待たれる。

4 まとめ

大学の生涯学習課（グループD）と自治体の生涯学習課が開講する英語クラス（グループG）の受講者を対象にニーズ分析を行った結果、最も学びたいスキルはスピーキングであり、リーディングにはあまり興味がないことが分かった。また、教材に絵本を使ったグループGでは、今後希望する教材として絵本を挙げた受講者が最も多かった（14人中9人）。授業では絵本を教材として使用しなかったグループDでは希望教材に絵本を選んだ人が10人中2人しかいなかったことから、受講者のニーズには、学習の経験（ここでは教師が選択した教材）が影響すると考えられる。しかし、今回は調査対象となった参加者数が少なかったため、結果を一般化するには無理がある。今後調査対象の人数を増やすとともに長期的なニーズの変化も調べたいと思う。

またグループDとの話し合いにより、海外旅行で英語を使う、英語検定試験に挑戦する、海外在住の家族（孫）とコミュニケーションするなどさまざまなニーズを学習者が持っていることが理解できた。一方、高齢であることから上達を諦めている人や、会話力上達にはリーディングの練習は不必要と考えている人がいることも分かった。ニーズ分析で得られたこれらの貴重な情報を今後の授業で活かしたい。

生涯学習課で英語を外国語として学ぶような状況では、海外旅行に行くようなことがない限り教室外で英語を使う機会は限られている。ニーズ分析がESP（English for Specific Purposes）、EAP（English for Academic Purposes）、そして移民を対象とした成人学習で盛んなのは、英語を使う状況が想定しやすく、目的に合った指導が必要だからだろう。日本の大学や自治体の生涯学習課が開講している語学クラスは、多くが教養を身につけることを目的としており、具体的な目的や到達目標が設定されているものは少ない。そのような場合は、ニーズ分析を「ニーズ探し」に置き換え、

教師と学習者が対話をする中で目的や目標を見つけ、それに向かうことで学習者の達成感や満足度が上がるのではないだろうか。今後、生涯学習として英語を学ぶ学習者のニーズ分析が多様な角度から研究されることが期待される。

引用文献

- 白畑, 富田, 村野井, 若林. 1999. 『英語教育用語辞典』 大修館書店
- Borg, M. (2001). Teacher's beliefs. *ELT Journal*, 55(2), 186-188.
- Cho, K.-S., & Krashen, S.D. (1994). Acquisition of vocabulary from the Sweet Valley Kids series: Adult ESL acquisition. *Journal of Reading*, 37(8), 662-667.
- Detaramani, C. & Chan, S. I. Irene (1999). Learners' needs, attitudes and motivation towards the self-access mode of language learning. *RELC Journal*, 30(1), 124-157.
- Dudley-Evans & M. J. St John (1998). *Developments in ESP: A multi-disciplinary approach*. Cambridge University Press.
- Graham, C. (2001). *Jazz Chants: Old and New*, New York: Oxford University Press.
- Grant, S. & Shank, C. (1993). *Discovering and responding to learner needs. Module for ESL teacher training*. Arlington County Public Schools, VA. REEP, Arlington Education and Employment Program. (ERIC Document Reproduction Service No. ED367196)
- Graves, K. (2000). *Designing Language Courses: A Guide for Teachers*. Boston: Heinle & Heinle.
- Ishida, T (2007). An Afternoon in Ueno Park (#1), *TOLD You So!* 3(1)
[On-line]. Available: www.eigosenmon.com/tolsig/publications.html
- Orem, A. R. (2005). *Teaching Adult English Language Learners*, Malabar, Florida: Krieger Publishing Company.
- Oxford, R. L. (1989). Use of language learning strategies: A synthesis of studies with implications for strategy training. *System*, 17, 235-247.
- Oxford, R. L. & Ehrman, M. (1992). Second language research on individual differences, *Annual Review of Applied Linguistics*, 13, 188-205.
- Pajares, M. F. (1992). Teachers' beliefs and educational research: Cleaning up a messy construct. *Review of Educational Research*, 62(3), 307-332.
- Richards, C. J. (2001). *Curriculum development in language teaching*. New York: Cambridge University Press.
- Weddel, K. S. & Van, D. C. (1997). Needs assessment for adult ESL learners, *ERIC Digest*, Adjunct ERIC Clearinghouse for ESL Literacy Education Washington DC. (ERIC Document Reproduction Service No. ED407882) 1-7.
- Wenden, A. (1999). An introduction to Metacognitive knowledge and beliefs in language learning. *System*, 27, 435-441.